

# 読み方



ソ連のウスタ  
ノフ国防相は82  
年12月6日、レ  
ーガン米政権の  
次期戦略ミサイ  
ル(MX)配備決定と西欧  
での新型ミサイル配備の  
準備について、これまで  
になく厳しい調子で非難  
するとともに、ソ連も対  
抗上、同クラスの新型I  
CBMを配備するだろ  
う、と述べた。

一方、米国議会は12月  
9日、元KGB(ソ連国  
家保安委員会)・レフチ

エンコ少佐の日  
本国内でのスパ  
イ活動に関する  
供述内容をセン  
セーションナルに  
発表した。

ここで思い起  
こされるのが、  
先週この欄で紹介  
した東京外語  
大教授・中嶋嶺  
雄氏の発言だ。

その要旨を再掲すると――。  
「世界はこんご、中ソ和解が進  
展する中で、多極化構造から二  
極化構造へと移行し、東西対決  
の色合いを一段と濃くしてい  
くだろう。しかも、その対立は自  
由主義と共産主義の社会システ  
ムの存在を賭けた本格的なもの  
に発展するだろう」  
さてそれでは、その世界構造  
の二極化による東西再編は、具

体的にはどのようなかたちで始  
まろうとしているのか。今週も、  
中嶋氏に加えて、ソ連研究家の  
青山学院大教授・寺倉弘壬氏を  
ゲストに迎え、その点に関する  
分析と予測をつけよう。

## ソ連は内外とも アメとムチ政策

竹村 アンドロポフ体制下のソ  
連では、国内の締めつけが強化  
されるのではないか。

つまり、十八年間のブレジネ  
フ政権でゆるんだタガを締め直  
すのではないか、といわれてい  
ますね。

寺谷 そう。おそらく、アメ  
とムチの政策がとられるでし  
ょう。たとえば、一方でKGB  
を強化する。KGBの議長だっ  
たゲイダール・アリエフが今度、

政治局員、さらに第一副首相へ  
と抜擢されたのは、その表われ  
ですね。

その一方では、私營農場、自  
留地をもう少し広げて、人々の  
士気といえますか、土地への帰  
属意識をかき立てて、生産性を  
上げる。

そのように、アメとムチの  
両方を効果的に使っていくの  
ではないかと思えます。

中嶋 その点は中国も同じです  
ね。鄧小平は一時、壁新聞を大い  
に鼓吹して、毛沢東は専制暴君  
だとか、秦の始皇帝だとか、と  
いう批判を許してきましたが、

ひとたび権力体制が確立する  
と、壁新聞を取り締まった。い  
まや反体制の雑誌を作っただけ  
で、懲役十五年です。

竹村 対外政策の面では、こん  
ごどのような変化が予想される  
だろうか。

寺谷 ブレジネフ政権の功罪を  
問うと、功はブレジネフ・デタ  
ントで、あとはすべて失敗だっ  
たといえます。実際、ブレジネ  
フ時代にソ連の軍力は強化さ  
れ、グローバル・パワーの国に  
のし上がった。米国と対等に交  
渉できる国になったわけですよ  
ね。したがって、この点に関し  
てはアンドロポフ政権も当然、  
ブレジネフ・デタントを継承す  
る。

竹村 具体的に対米政策に変化  
は出てきますか。

寺谷 さしあたって崩れかかっ  
た米国とのデタントを再構築す  
るでしょうね。ただ、デタント  
とはいえず、注意しなければい  
けないのは、ソ連が一方的に軍事  
力を削減するというものではな  
いんです。私はアンドロポフ体  
制は、ウスタノフとその背後の  
軍部によって支えられている  
「ストラトクラシー」体制だとみ  
ているんですが、だとすればソ  
連は軍事力をさらに強化しなが  
ら、対米交渉にのぞむという方  
向をたどるのではないでしょう  
か。

中嶋 中国もこんご、日米をは  
じめ西側全体に厳しい姿勢をと  
ってくると思います。早い話、  
日本が対米関係を強化すればす  
るほど、日本に対して厳しくな  
るでしょうね。

第84回

●特別鼎談 / いよいよ始まる「世界激変元年」の不安材料を総まくり

83年1月

## 中曽根訪米の焦点は

## アジア再編をめぐる『日本の防衛』だ

290円



連載

## 世界の

### 首相訪米の 課題は西側 軍備強化

竹村 要するに、ソ連はこれから、戦略兵器制限交渉の舞台などでカッコつきの「デタント」を進めながら、その実、軍事力をさらに強化してくるだろう、つまり、対外政策でも「アメとムチ」を使い分けると。いってみれば、米国のMX（上）配備決定を厳しく非難したウズチノフ（国防相）



■イラスト / 太田宏明

ば、そうした米ソの野合と対決が進む中で、当然、新たな東西再編も行なわれるわけですね。

寺谷 ええ。たとえば、ソ連は70年代後半、アングラ、エチオピア、モザンビーク、南イエメン、そしてアフガニスタンに進出し、陣取りを急速に行ないました。ところが、80年代に入ると、それがなだれ現象をおこした。アングラはソ連に二十億ドルの借款があるほか、エチオピアとベトナムは三十億ドル、キューバは九十億ドルの借款がある。各国とも台所事

情が苦しい

ので、現物返済をしているありきですが、それでも、なかなか返しきれない。そんなことで、ソ連離れがすすんでいる。ですからアンドロポフ政権は当面、タガを締める努力をするでしょうが、ただ、70年代後半のように急速な陣取りはむずかしいでしょうね。現に、アンドロポフはバキスタンのハク大統領にアフガニスタンから撤退してもよいと非公式に述べたというニュースがあります。ま

### 寺谷弘壬

(青山学院大教授)

た、ポーランドのワレサの釈放も意味深長です。

竹村 アンドロポフ政権は、対外的に引き締めを行なうために、まず対社会主義圏向け、あるいは対米向けにそうした「アメ」のシグナルを、いま盛んに送っているわけですね。

中嶋 ちなみに、アジアでも、変化があらわれています。ソ連離れをはじめたベトナムが少し中国に近づいてきた。最近、ベトナムの代表が北京を訪問しています。それから、中国と北朝鮮の間にも動きがある。ここでとくに問題となるのは中国が、カンボジア問題でボル・ポト政権を支持している点ですが、いまや、ボル・ポトでなくてもい

### 中嶋嶺雄

(東京外語大教授)

いという姿勢をみせているんです。中ソ国境、中越アフガンの三すくみを軸にして、中ソの間に再編成の動きが出てくることはたしかです。

竹村 東側の内部でそのように再編成が進展しているわけですが、翻って西側内部はどうか。おそらく、通商摩擦などでギスギスした西側諸国の関係調整が求められるでしょうね。たとえば、日米関係では、1月の中曽根訪米で、経済摩擦に目を閉じるから、その分、防衛努力をしてほしいなどと、政治と経済のパートナーみたいなことが行なわれるのではないかと私は見ているんです。いずれにせよ、1983年の世界激変は、アジアから火がつきそうですね。

